

特集に当って

新村 秀一

雪、雪とは私たちにとって何であろう。

中谷先生のような科学の世界であったり、白い恋人たちの世界だけであろうか。

雪は日本を分類する大きなキーワードでなかろうか。雪は、他の類似の気象現象とは異なる。雪は、雨でもなし、大きな災害をもたらす台風でさえもない。日本を日本アルプスの南北に2分する地勢上の分類であると同時に、日本人の生活信条を差別化する鍵でもある。雪国文化圏はあっても、台風文化圏があるとは思えない。

他の分類項目としては、東西に分けるフォッサマグナがある。糸魚川―静岡線を境にして婚姻圏が異なったかのように覚えている。この他、海洋民族か山岳民族かの議論があろう。神様ひとつ取っても、海のかなたに西方浄土（海志向）を考えたり、榊や山の神（山志向）にみるように二分化傾向を認める。テレビをみていたら、渡部昇一さんが「石原慎太郎さんは、日本人は山志向だ。その証拠に日本には優秀なヨットマンがいない」等と言っていた。果たしてそうであろうか。理性や知性で割切れない、それがお国自慢であり育った郷土からの無意識の制約であろうか。

さて、雪は雪国の人にとっては広畑さんの言う通り正の特性と負の特性を持つ。雪国の人間は両方を、それ以外の人は正の特性をのみ享受するようである。端的な例は、雪の上でスキーを楽しむ人と、雪の下で生活する人との違いであろうか。

今回の「雪」特集は、雪国の人にとって負の特性を減少あるいは転化させ、正の特性を少しでも増やす工夫を考えるきっかけになればと考えて行

しんむら しゅういち 住商コンピューターサービス㈱
〒101 千代田区東神田2-5-15

なった。

雪の中から「生活を楽しむ知恵の宝を掘り起こそう」特集号と考えてもらってもよい。

トップの視点には、中沖富山県知事をお願いした。越の時代の初代知事の伴家持以来、戦前には雪の贈り物である水力発電で以て幻の電源立県構想による県民無税の壮大な計画を描いた県知事等を経て、21世紀へいかなる施策を考慮中であろうか。

富山県のとなりには、豪雪地帯の上越がある。生活の知恵としての雁木はよくご存じと思う。また、越後塩沢の地にて20年も費やして書かれた江戸期の雪国百科全書ともいべき「北越雪譜」の世界でもある。雪国の人は一般に辛抱強いといわれている。雪を知らない江戸の人に雪国の生活を知らせたいと願って書かれた20年におよぶ文化に対する継承努力は、永遠の生命を以て現代に息づいている。

岩手の雪は、筆者による幼年時代の体験からの記述が面白い。岩手に対する郷土愛がうかがい知れる。そして「沢地村の医療」に関しては多くの読者にぜひ注目していただきたい、私も知合いの医者から一読を薦められそのままになっている。これを機会に読んでみたい。

広畑氏は、札幌市における総合除排雪システムを中心にして克雪対策の現状を読者にわかりやすく説明されている。そして、自然との調和(和雪・親雪)のため、自然に適応した生活文化活動に解決を見いだそうとされている。

私にはよいアイデアが思いつかないが、負の経済効果を克服するには、まったく次元の異なった雪を楽しむ文化に転化することも1つの解決策と考える。

雪の問題をOR的にとりあつかうまでにはまだ若干の時間を要することとは思いますが、問題の所在を広く知っていただくという見地からこの特集を企画した次第である。